

Title	十六世紀初頭インド洋におけるマムルーク朝エジプトとポルトガルの関係
Sub Title	
Author	湯川, 武(Yukawa, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.122(620)- 123(621)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

武蔵野郷土館

史学科夏期見学旅行

七月一日～五日

仙台市周辺―牡鹿半島―平泉周辺―北上市―盛岡市(解散)

東洋史談話会例会

昭和四十三年五月二十日 於一二二番教室

十六世紀初頭のインド洋におけるポルトガルとエジプトの関  
係史 湯川 武

アラビア論理学史の展望 岩見 隆

昭和四十三年六月二十四日 於一三一番教室

「孟子の心性論」―Mencius on the Mind; I. A. Richards  
―の紹介を通じ、中国古典の解釈をめぐつての一般的問題点に  
ついてのノート 高山方尚

昭和四十三年十二月六日 於四一二番教室

プラナーナについて 高橋英二

昭和四十三年十二月十六日 於五三三番教室

タゴールの日本ナショナリズム批判

臼田雅之

研究発表要旨

「孟子の心性論」―Mencius on the Mind; I. A. Richards―  
の紹介を通じ中国古典解釈をめぐつての一般的問題点  
についてのノート 高山方尚

全四章中第一章「翻訳の諸問題」を紹介することゝあわせて、  
その日本の特殊性を歴史的に回顧し、その問題の重要性等を具  
体的例証のうちに考察したものを発表した。

第一章の内容は、現在ほとんど喪われようとしている中国の伝  
統的古典解釈の技術と、それに忠実であろうとした過去の西洋人  
の方法と、そのいずれからも全く自由な論理的解釈とを対置し、  
この三者の比較検討を著者独自の立場(「意味の意味」等に於ける  
言語学的方法)から、いわば第三の中国古典「理解」への可能  
性を論証しているものである。

以下の諸章は時間の都合上次の機会を待たねばならなかった。  
以上の内容の紹介に、一、二の未紹介の著者の中国語学関係の  
論考を参考迄に挙げておいた。

十六世紀初頭インド洋におけるマムルーク朝エジプト  
とポルトガルの関係 湯川 武

ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見によつて東方に進出する  
こととなつたポルトガルは、インド洋の制海権を得て、それによ

りインド洋貿易の実権を握ろうとした。一方インド洋貿易に関しては、マムルーク朝エジプトが重大な利害関係を有していた。というのは、インド洋—紅海—地中海という既存のルートを経る、いわゆる東方貿易は、それに対する高関税政策によつて、マムルーク朝にとつてきわめて重要な意義をもつていた。またマムルーク朝を利害関係を同じくしていたのは、同じルートの地中海側の貿易権を握つていたヴェニスである。かくしてマムルーク朝はヴェニスの援助等を得て、アミール・フセインをインド洋に派遣し、ポルトガル艦隊と対決したが（一五〇八年）、ポルトガルのインド副王フランシスコ・アルメイダに敗れてしまった。しかしポルトガルのインド洋征覇も完全なものではなく、これによつて東西間の貿易が構造的に変化をこおむるということではなく、単に軍事的に拠点をおさえたにすぎなかつた。旧ルートによる東西貿易は数年の間、一時的に衰えたにすぎなかつた。しかしマムルーク朝にとつてこの遠征の財政的負担と、関税収入の減少はそれまでで弱体化していた国家財政に一層の拍車をかけ没落へと進んでいった。

### タゴールの日本ナショナルイズム主義批判

白田雅之

この研究発表は、大正五年（一九一六年）に、タゴールが初めて来日した時に行われた、東大と慶応における二つの講演を検討したものである。

分析の契機は、二つの講演が、日露戦争後顕著になつた日本の国家主義的傾向をテーマとし、それに批判を加えたものでありながら、当時の日本知識人の反応を見る時、そのテーマの重さへの驚くべき閑却があつたという点である。

日本において、タゴールが思想家として、まともに取り組まれたことが曾てないことは、竹内好氏が再三指摘されてきたとおりである。この研究は、タゴールのナショナルイズム国家主義批判がロマン・ロランに与えた衝撃を対極におきつつ、何故日本においては、そのテーマが正当に問題にされなかつたかを、タゴールの講演を整理して紹介しながら、所謂「近代化」の問題とからめ、大正五年の時点に焦点を合わせて、できるだけ実証的に明らかにすることを試みたものである。

### 西洋史学会例会

昭和四十三年五月二十九日 於三田第一会議室

マーシャル・プランについての史的考察 小川決子

イギリス史の諸問題 森岡敬一郎

昭和四十三年六月十二日 於三田第一会議室

比較文化史—周辺文明の存在 有富 英洋

ピューリタニズムの起源—トリネリユードの見解をめぐつて 上山 雄治

昭和四十三年十月十六日 於三田五四三番教室

一九一四年の七月危機末における独逸関係 米田 治